

# 社会制度と経済

西 淳

## I はじめに

社会制度と経済体系との関連については、これまでいくたびも議論されてきました。その背後には、経済学が純粋化を推し進めた結果、社会的慣習や制度、階級構成などの問題を考慮せずに、摩擦の存在しない経済体系の運行のみを議論する傾向があったからであると考えられます。もちろん、その研究でえられたさまざまな理論的命題を捨ててしまってよいというわけではありません。純粋経済学的研究にも、人間の経済行動を分析するためにさまざまな理論的ツールを磨きあげ、カバーできない領域についてはそれを包摂するような理論体系を構築するよう努力してきた膨大な蓄積が存在しているからです。

しかし、やはりそのような認識枠では取りこみきれない領域が存在しますし、そのような領域においては、純粋経済学的な思考枠においては恣意的であると思われることでも、分析をすすめていかなければなりません。そのような意味で、本稿では純粋経済学の領域ではあまり考慮されることのない市場や社会階級の機能的変化の問題を取り扱いたいと思います。

## Ⅱ 制度変化の視点

最初に、議論の前提を明確にしておきましょう。まず、本稿におきましては簡単化のために、経済学説の議論を非常に暴力的に簡略化します。たとえば古典派などといってもその範疇に入られている人や学説はさまざまですから、「これが古典派だ」というような“古典派なるもの”は存在しません。しかしそのような中でもあえて、古典派を特定の人物によって代表させて議論します。

この問題に関して、授業でとりあげるのは次の4点の関連です。

1) それぞれの学派や学者（授業では古典派、ワルラス、ケインズがとりあげられます）が生き、その中で理論体系を作り上げた社会における社会階級の区分、およびそれぞれの区分が経済体系にもたらした機能の比較の問題です。それらの要因が経済の動きに対して、どのような影響をもたらしたかを簡単に説明します。

2) 先の社会階級の区分が、それぞれの学派や学者に対して、経済の主導原理をどのように考えさせたのかという問題です。経済学史を学んだ人なら聞いたことがあると思いますが、ここで考えるのは「セイ法則」の問題です。この法則を是認するか否定するかは、実は、彼らの生きた社会経済体系（ここでは社会階級の問題のみをとりあげますが、授業では他の面もとりあげるつもりです）に大きく依存していることを示します。

3) そのような学派や学者たちの考え方を規定していた市場の機能についての問題です（ただしこの点についても、社会階級の他に、独自に考察すべき問題があります。それはJ. ヒックスが述べている「伸縮価格経済」と「固定価格経済」の問題です。しかしここでは省略します）。

4) そして最後に、そういった人々を背後で支えていたイデオロギーの問題です。授業では、だいたい以上のようなことの問題を簡略に説明したいと思います。ただし、ここでそれらをすべて説明するわけにはいきませんので、先に

も述べたように社会階級の問題についてのみ述べたいと思います。

### Ⅲ 古典派の経済学の制度観

古典派の経済学などといっても先にもいいましたようにさまざまですから、ここではリカードに代表させましょう。リカードによりますと社会階級の区分は(1)資本家、(2)労働者、(3)地主にわけられます。リカードにおいては地主の問題は、とりわけ長期的な経済成長の問題でたいへん重要となりますが、ここではとりあえず捨象しましょう。資本家と労働者などというと、現代の経済学において経済体系の登場人物が企業と家計からなる、という話と似ているように思われるかもしれませんが、しかしかれらの考えた資本家は今日いわれる企業とは機能的に違いますし、労働者も家計とは異なっています。

彼らの階級観の特徴とはいかなるものでしょうか。気づく点をあげてみましょう。

まず資本家概念について。資本家といえば現代では、企業活動のために資金を供給する主体を指すと思われませんが、古典派的な世界では、今日いうところの企業者、つまり投資や生産、そして雇用等の具体的な意志決定をおこなう主体も兼ねた人をイメージしていました。つまり、かれらの経済学においては資本家とは、経営資金の需要者であり、かつ供給者であったのです。この時代は現代のような大量生産・大量消費の時代ではなく、そのため小規模経営で基本的のみずからの運転資金だけで経営が可能だったと考えられますので、現代のようにより広く人々から資金を集める必要がなかったという事実の反映であるとも考えられます。

さらに労働者も、現在の家計の概念とはかなり違ったものです。つまり諸主体の経済体系における機能（あるいは役割）が、現代の経済学で考えられているものと異なっているということです。古典派においては消費主体は資本家と労働者ですが、貯蓄をおこなうのは主として資本家に限られていました。その

理由には、まだ現代のように社会全体の生活水準が高くなかったため、労働者はみずからの稼いだ所得のほとんどを消費にまわさざるを得ず、貯蓄する余力をもたなかったということが挙げられます。これは現在の経済学の家計が、労働サービスを供給し、消費をすることはもちろんですが、貯蓄を計画的におこない、なんらかの資産からの報酬を得る主体でもあることを考えますと、かなり違うことがわかつています。

大量生産・大量消費の時代に入り労働者の賃金も高くなってきますと、とうぜん貯蓄する余力が生まれ、それが会社の株式会社化に拍車をかけることとなります。しかし古典派の時代には、広範な地域から資金を募る必要も少ないですから、とうぜんのことながら金融市場の整備（多用な金融商品の発売など）も不十分だったわけです。

このような古典派の見方はまた、労働と所有の分離を非常に明確に前提にしています。つまり生産手段をもっている人々ともっていない人々を明確に二分するという考え方です。現代でもその分離は明らかではないか、と思われるかもしれませんが、現代においては労働者も株式所有を通じて部分的にはありますが会社あるいは生産手段を所有できることになっており、その意味で従来ほどそれは明らかではありません。つまり経営と所有の分離によって、労働と所有の分離はいくぶん曖昧にさせられてしまったということです。（もちろん生産手段に対する意志決定の問題についてはまた難しい問題があります。授業ではそのあたり問題も触れるでしょう）。これを「もつものともたざるものの実体的区分」と呼んでおきましょう。

#### Ⅳ 古典派の制度観から導かれる経済学的帰結

以上のように階級観は、現代の経済学とはかなり異なっていることがわかるでしょう。そしてこのような階級観が、経済体系の見方にいかなる影響を与えたかという問題に、最後にふれておきましょう。

まず気づくことは、先に述べたことは、実は相互に依存しあっているということですが。

まず「もつものともたざるものの実体的区分」は、最初にエンクロージャーなどによって引き起こされたことはよく知られていますが、その関係を日々再生産していったのは、労働者が貯蓄する余力がない（しかし毎日働きに来てくれるように、生存を脅かさない程度の）範囲に賃金率が押さえられた結果、労働者が資金を提供するという意味での資本家になれないという過程です。また古典派の人々にとって、資本家と企業者の概念的区分が十分なされていないのも、貯蓄する余力がなかったため労働者は資金供給者になることができず、また先に述べたようにまだ基本的に小規模な経営だったため、企業者はみずからの運転資金で経営をすすめていけたからです。今日のような経営と所有の分離は一般的には起こっていませんでした。このように階級の区分は単に、ある時代と与えられていただけでなく、それが金融市場の形態や、社会全体の生活水準などに規定されていたということもわかると思います。

さらに以上のような視点は、古典派の人々に以下のように経済を観察するようにながしたと考えられます。その第1は、貯蓄主体が投資主体を兼ねているため、ともすれば、貯蓄されたものはすべて次期の生産能力拡張のための資本蓄積にまわされると考えてしまったということです。このような見方を「セイ法則」といいます。社会の総需要と総供給が一致する条件は、また貯蓄と投資が等しいという条件に書きかえることができる（ただし、同じ均衡条件だとしても、需要が供給を規定するのか、供給が需要を規定するのかを区別することは重要ですが）ことはマクロ経済学で学ばれると思いますが、まさに古典派の人々は貯蓄は自動的に投資に等しい（このようなことを、何らかの調整の結果等しくなるということと区別して“恒等的に等しい”といういい方をしますが）と考えがちになってしまったのです。もちろん、そうでないように書かれている記述もみられないことはありませんが、彼らの思考の根底にあったのはこのような経済の仕組みであったといえると思います。

そしてその結果として、需要側よりもむしろ供給側を重視するようになった

ということもいえそうです。労働者は自らの所得をすべて消費にまわし（そうでないと所得の少ない労働者は生きていけません）、資本家は消費した残りはすべて資本蓄積のために支出してしまうのですから、供給に対して需要が不足することはないからです。リカードも『経済学および課税の原理』の第21章において、「需要には全く限界がない」と述べています。リカードはイギリス資本主義はやがて危機におちいると考えていましたが、その理由は需要側の要因ではなく、土地の希少性によるものだと考えていました。つまり、需要の不足によるものとは考えなかったのです。

またイデオロギー的には、貯蓄は美德であるとする考え方が支配的であったともいえるのではないのでしょうか。貯蓄は将来の経済成長のための資本設備の増強に役立ち、したがって国民の厚生を高めるのですから、消費をひかえて貯蓄に励むのがよい、と考えたわけです。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』においても、よく働き、つつまじやかに生活する、つまりできるだけ貯蓄をおこなうように心がける主体がすぐわれるというプロテスタンティズムの禁欲精神が、資本主義の勃興に影響を与えたという記述がありますが、これはまさに古典派の人々の発想に近いということができましよう（もちろんここでは、労働者は貯蓄余力をもつと想定されていますが）。

しかし、そのようなことがつねにいえるわけでないことはいうまでもありません（もちろん、このことはウェーバーに対しては当てはまりません。彼はある一定の歴史的段階においてはそうだったといっているだけです）。なぜなら、みんなが貯蓄にはげむなら消費が減って需要が減るわけですから、経済成長は持続しないであろうからです。ゾンバルトなどはむしろ消費の重要性を解きましたし、この授業でも重要となるケインズにおいてもしかりです。

このように見てきますと、社会階級という経済学にとって外生的な与件とでもいうべきものが、経済の動きに大きな影響を与えるということがわかるでしょう。そしてその時代の社会制度に、経済学者たちの考え方も大きく規定されているということがわかります。

## V おわりに

もちろんここで述べたことはまだ、すべての話の入り口にしかすぎません。もうすこし書きたい思いにかられはしますが、残りは授業で展開することとしましょう。授業では古典派からワルラス、そしてケインズへ至る流れを、Ⅱでのべたような視点から見ていくことによって、社会の制度的な側面が経済システムの動きにいかなる影響を与えるのかを詳しくみていきたいと考えています。